

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32503

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13058

研究課題名（和文）明治二〇年代の元禄文学復興における内田不知庵の芭蕉及び蕉門俳諧の評価に関する研究

研究課題名（英文）A series of studies on Uchida Fuchian's haikai in the mid-Meiji period

研究代表者

大貫 俊彦（ONUKI, Toshihiko）

千葉工業大学・工学部・准教授

研究者番号：70738426

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：明治25年に正岡子規が登場して本格的な俳論を発表しはじめる以前、俳壇とは直接関わりのない文芸批評の領域において、俳諧が明確な文学的価値観のもとに捉えられていた諸相を批評家内田不知庵を中心に考察した。具体的には最初期の不知庵の文芸批評から明治25年の『文学一斑』までの記述に含まれる俳諧に関する言説を調査・整理し、その引用元に遡りながら、不知庵の俳諧観を検討し、またどのような俳書を読んでいたのかについても明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義としては、従来ほとんど言及・考察されることのなかった子規以前の俳諧に関する言説について、おもに文芸批評の領域のなかでどのように語られていたかを考察したことにある。批評家として活躍をはじめた内田不知庵がある出来事から俳書と出会い、それを精読し、自らの文学観を通して俳諧を捉え評価していく。本研究ではそれを時系列に明治25年の『文学一斑』における叙情詩として俳諧を位置づけるところまで検討した。

研究成果の概要（英文）：In general, literary history accounts state that haikai in the modern perspective began with Masaoka Shiki. However, before Masaoka Shiki, Uchida Fuchian had examined haikai from a modern and aesthetic point of view in his literary criticism. My series of studies were conducted to clarify the above events. By examining Fuchian's literary criticism one by one, we have clarified his thoughts on haikai. We also found out to which literature he refers.

研究分野：日本文学

キーワード：文芸批評 俳諧 内田不知庵 内田魯庵

1. 研究開始当初の背景

明治期における俳諧の歴史は正岡子規の登場に象徴され、現在の俳諧研究にまで続く松尾芭蕉および蕉門俳諧の批評的な言説は子規の俳諧革新運動によって開始されたというのが現在における通説である。これは子規や俳諧に関する著述も多い柴田宵曲の評論(「新俳句の準備時代」『俳句』15巻1号、昭和41年1月)や、俳諧研究の領域では松井利彦の『近代俳論史』(桜楓社、昭和40年8月)、さらには芭蕉の研究史を通観した記述(「研究史通観 明治時代以後」『国語国文学研究史大成』昭和34年12月)にも共通している。そして子規が登場する以前の俳諧については、俳諧宗匠等の実作に携わった者たちを中心に俳諧の停滞について言及するというのが主なものであった。これらの記述からも分かるように、子規以前の記述で対象とされているのは俳句を実作していた者に関する言及であり、広く明治時代の新聞や雑誌に掲載された記事に目を通せば、俳句に関する言及は決して俳諧の実作者だけにとどまらない。試みに明治20年代初頭の小説家(饗場篁村、幸田露伴)や文芸批評家(内田不知庵)たちの言動を参照すれば、この時期の文学者たちのやりとりのなかに芭蕉やその周囲の俳諧が話題となり、また各々が所蔵する俳書の貸借や筆写などが行われている様子を見て取ることができる。江戸文学の素養を持ち合わせているというそれぞれの背景を抜きにしても、当時は復古現象として元禄文化が再評価されていた社会事象があり、井原西鶴や近松門左衛門などとともに芭蕉も脚光を浴びていたのである。そして、このような動きは上記の俳諧史の記述では捉えられていない。本研究は、この研究史の間隙を埋めるべく、特に子規登場以前に文芸批評のなかに俳諧を取り込み、活発に発言をした内田不知庵に焦点を当て、どのような俳書を読み、俳諧のいかなる箇所を評価しながら自らの俳諧観を養い、どのような論評を行ったのかを検討することにした。黎明期の文芸批評は創作の良し悪しを見極めるのみならず、新しい文学のあり方を模索し、そこに導く役割も果たしていた。そのような場において俳諧はどう捉えられていたか。これが研究開始当初の学術的背景である。

2. 研究の目的

本研究は、明治20年代初頭のいわゆる元禄文学の再評価の機運のなかにおいて、当時文芸批評家として活躍していた内田不知庵(後の内田魯庵)がその批評で取り上げた松尾芭蕉および蕉風俳諧に注目し、その言及の仕方や評価の諸相を同時代の文献を用いて検討するとともに、明治20年代初頭から中期にいたる文学論のなかで松尾芭蕉および蕉風俳諧がどのように評価され、また位置づけられてきたのかを明らかにすることを目的とした。これを俳諧研究史の文脈に接続するならば、明治期の芭蕉評価が正岡子規の俳諧革新論に始まるとされてきた従来の通説を刷新し、子規以前にもすでに文学界では芭蕉および蕉風俳諧が注目されていたこと、そしてそれが明治20年代の文学観の枠組みのなかで捉えられていたことを実証的に明らかにすることである。

3. 研究の方法

研究の方法としては同時代の資料を用いた実証的研究を行う。まずは坪内逍遙の日記に記載された俳書に関する不知庵の交流を確認する。逍遙が不知庵の来訪により俳諧に興味を持ったこと、不知庵の持つ俳書を借用し筆者している点などに注目する。重要なのは当初俳句を創作することに関心を持っていた逍遙が、文学として俳諧を理解する方向へと重点を変えていくことである。俳諧がどのようなものとして捉えられていたのかが、ここから明らかになる。

これらを踏まえ、続いては内田不知庵の文芸批評や随筆における俳諧への言及を調査し、その主張を整理するとともに、いかなる文献を参照しているのかについても調べる。これにより不知庵の俳諧観を明らかにするとともに、その読書の傾向、範囲を絞り込んでいく。具体的には『女学雑誌』、『国民之友』、『国民新聞』に掲載された記事を見直すという手続きを取る。なお内田不知庵は批評を執筆するに際して様々な筆名を用いていることから、筆者の特定にやや困難を生じ、現在も研究の妨げとなっている。本研究を遂行するにあたり、すでに整理された著作目録を参照しながらも、他の記事にも目を通して間違いなく不知庵であると実証できるものは新たに加えるという整理を行う。本研究の範囲は、不知庵の批評第一作目から明治25年の『文学一斑』までとする。『文学一斑』までとする理由は、本書において不知庵は俳諧を叙情詩として捉え、かなりの分量を俳諧に費やしているのみならず、この記述が当時の不知庵自身の俳諧論の到達点となっていると考えられるからである。もちろん、これ以後も不知庵による俳諧への言及は続き、俳諧研究史で不知庵の芭蕉研究として最も早いものとして言及される『芭蕉庵桃青』まで広げることができる。しかし、前述の理由と正岡子規が『日本』に登場するのが明治25年であることから、『文学一斑』までとするのが妥当であると考えた。また研究を進行するにあたり、不知庵の俳諧論との差をはかるために、同時代の俳諧に関する代表的な批評も適宜参照した。

4. 研究成果

以下に本研究の成果について報告する。2019年の研究成果としては、「明治20年代初頭における蕉風俳諧の受容とその評価について」（『人文研究』第49号、2020年3月）において、正岡子規が登場する以前に一部の文学者のなかで松尾芭蕉や蕉風俳諧の評価が行われていたこと、そしてそれらが俳諧研究史のなかで言及されていないことを指摘し、本研究の取り組むべき問題点を整理した。それを受けて同論文では、坪内逍遙の日記の記述を整理し、批評家内田不知庵の来訪によって逍遙の俳諧への関心が大きく変化している様子、また不知庵からどのような俳書が借用されたのか、さらに逍遙がどのような書籍を不知庵以外の知人から借りているのかを調査した。さらに逍遙の俳諧への興味を引き起こした内田不知庵について『女学雑誌』に掲載した約一年半の批評・随筆から俳諧に言及している箇所を摘記し、その主張を整理するとともに可能な限り参照している文献にさかのぼった。結論としてこの時期の不知庵の俳諧に関する言及には、自らの文芸批評の価値基準としていた詩文論の主張に連なるもの、俳諧の歴史と展開について概説し、芭蕉を評価する一方で、その後の悪弊を指摘するもの、俳諧の個々のテーマに関するものという三つに分けられることを考察した。また、この研究過程において従来不知庵の執筆とは認識されていたかいたいくつかの記事について、俳諧の観点から判断したときに不知庵の著述と確認できるものがあり、これについても証拠を示したうえで特定した。

次に2020年度の研究成果について概要を記す。2019年度の成果を受けて、民友社の『国民之友』、『国民新聞』に掲載された不知庵の批評・随筆・紀行文等のうち約二年分を検討し、その主張や俳諧の言及の変化について整理し、同じく参照している文献を調べた。まず不知庵の言及の変化であるが、民友社の新聞、雑誌に掲載するようになると俳諧への言及が多岐にわたることが挙げられる。探訪記事や紀行文に不知庵の軽妙な発句が登場するようになり、また文芸批評においても作品の批評をすることに代えて、有名な発句を掲げて、自らの批評の意を示すということを行うようになる。しかし両者ともに到底真摯なものとは思えないものであり、特に後者に関しては、中西梅花にその批評態度を厳しく批判されている。おそらくこれは不知庵と民友社の関係性にもよると思われる。上記のようにこの時期は俳諧の言及に真剣さが欠落し、やや冗漫になるものの、『国民之友』明治24年6月に載せた「東花坊支考」の前後から俳諧に関する言及に活気が戻っている。なお、各言及については可能な限り不知庵が参照した文献を調査したが、『女学雑誌』時代に参照した文献とは異なっており、不知庵の俳書の渉獵と読書が停滞することなく、その後も継続していたことが分かる。以上については「内田不知庵の文芸批評における俳諧の位置づけとその諸相」（『文芸学研究』第24号、2021年3月）にまとめた。

最後に2021年度の研究成果について整理する。研究の最終年度は不知庵が自らの文学論を集成した『文学一斑』を主に研究対象として取り上げた。本書はその冒頭で文学の概要を説き、「叙事詩」、「叙情詩」、「世相詩（ドラマ）」の三つの分類から文学を捉えなおそうと試みた著述であり、三分類の一つ「叙情詩」に和歌と並んで俳諧を位置づけ、詳細に自らの俳諧論を説いている。そこで本文中に言及されている俳諧に関する主張を整理し、その典拠を特定する手法をここでも実施し、さらに『文学一斑』は英米文学の文学書を多く参照していることを踏まえて、「叙情詩」の概念がいかなる書物によるものであるのかについても並行して調査した。そして西洋美学の観点による「叙情詩」と俳諧がどのように結び付けられているのかを併せて考察し、それらが個人の理想を表出した芸術的表現として捉えられていることを明らかにした。ただし、俳諧を美学の観点から評価している一方で、連句などの俳諧の「座の文学」としての側面がここでは切り離されてしまっていることについても指摘した。以上の研究についてまとめたものが「内田不知庵『文学一斑』における俳諧—明治25年、俳諧はどのように文学論に位置づけられたか—」（『文芸学研究』第25号、2022年3月）である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大貫俊彦	4. 巻 25
2. 論文標題 内田不知庵『文学一斑』における俳諧 明治25年、俳諧はどのように文学論に位置づけられたか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文芸学研究	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大貫俊彦	4. 巻 24
2. 論文標題 内田不知庵の文芸批評における俳諧の位置づけとその諸相 民友社時代から『文学一斑』へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文芸学研究	6. 最初と最後の頁 18-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大貫俊彦	4. 巻 49
2. 論文標題 明治二〇年代初頭における蕉風俳諧の受容とその評価について：坪内逍遙・内田不知庵を起点に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉大学人文研究	6. 最初と最後の頁 61-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------